

立教大学学術推進特別重点資金（立教SFR）
プロジェクト研究（共同プロジェクト研究）
2017年度研究【経過・成果】報告書

研究代表者	所属部局・職		氏名					
	文学部・教授		前田良三 印					
研究課題	ドイツ文化研究における解釈学のメディア論的転回——国際的・学際的研究基盤の構築							
研究組織 (研究代表者・研究分担者) 2018年3月現在	所属研究機関・部局・職		氏名					
	立教大学・文学部・教授		前田良三（研究代表者）					
	立教大学・文学部・教授		副島博彦（研究分担者）					
	立教大学・異文化コミュニケーション学部・教授		新野守広（研究分担者）					
	立教大学・文学部・教授		井出万秀（研究分担者）					
	立教大学・文学部・教授		坂本貴志（研究分担者）					
	立教大学・異文化コミュニケーション学部・教授		浜崎桂子（研究分担者）					
研究期間	2016年度 ～ 2017年度							
研究経費※ (上段：支出金額)	2016年度		2017年度		年度		総計	
	2,933,250	円	2,264,867	円		円	5,198,117	円
(下段：採択金額)	3,000,000		2,265,000				5,265,000	

※1円単位で記入

研究の概要 (200～300字で記入、図・グラフ等は使用しないこと。)

本プロジェクト研究は、文学・文化研究の根幹をなす解釈行為を、現代のメディア技術、とりわけデジタル・アーカイブ（以下 DA）と情報のネットワーク化との関連において捉え直し、DAは人文学にいかなる可能性を提起するのか、またそれによって人文学がどのように変容してゆくのかという問いを、ドイツ文化研究の各分野に即して具体的に考究しようとするものであり、**a)** DAを自覚的かつ分析的に利用することで文化研究においてどのような新たな解釈行為が行われ、どのような研究上のパラダイムが発生するかを実践研究する実証的研究と、**B)** これを学問史およびメディア理論の枠組みのなかに位置づけて考察する理論的研究、さらに **y)** 個別の研究事例に即して DA の存在をインデックス化し、これをデジタル情報として公開することを 3つの柱として進めた。研究は海外の研究協力者および他分野（宗教学、日本学など）との密接な連携のもとに行い、国際的かつ学際的な研究基盤の構築を図った。

キーワード (研究内容をよく表しているものを3項目以内で記入。)

[アーカイブの進化] [解釈学の再規定] [人文学の再定義]

研究【経過・成果】の概要 (図・グラフ等は使用しないこと。)

2017年度は、2016年度末に立教大学で開催した国際シンポジウム「Interpretation nach der „digitalen Wende“ (デジタル・ターン以降の解釈学)」(2017年2月25日～27日、太刀川記念館3階多目的ホール)の成果を踏まえ、2017年9月に国際ワークショップ「人文学とデジタル・メディア」を開催(9月19日)、それと前後して研究会を行なった(9月18日・20日)。ただし、このワークショップは、予定していた海外からの研究協力者2名が、それぞれやむを得ない健康上・職務上の理由により急遽参加を取りやめざるをえなくなったため、当初の計画を大幅に見直すこととなった。そのため、年度後半の研究計画を一部手直しし、研究代表者および一部の分担者がワークショップに参加できなかった研究協力者をその研究機関(ドイツ)に訪ね、研究打ち合わせと追加の資料調査・収集を行うというやりかたに切り替えた。以下、時系列に沿ってプロジェクト全体の研究経過を概観し(①～⑤)、それに続いて研究代表者・分担者が個別に遂行した研究内容について略述する(⑥)。

- ① 2017年度前半は、2月に行われた上記国際シンポジウムで確認された研究方針に従い、9月の研究会およびワークショップに向けて、隔月(4月、6月)に研究代表者・分担者全員が参加する会合を持ち、「研究の概要」に記したα)の個別事例に即した実証研究と、β)理論的研究を中心に意見交換を行うとともに、ワークショップの内容の詰めを行った。また、国際シンポジウムの成果を報告書としてまとめ、立教大学ドイツ文学研究室刊行の『ASPEKT』51号に掲載した(『デジタル・ターン以降の解釈学』、『ASPEKT』51号、41～58ページ)。
- ② 9月19日に開催した研究会と国際ワークショップは、上記のように予定していた海外からの参加者3名のうち2名の来日が開催直前に不可能となったため、ワークショップのテーマを「Regionalwissenschaften nach der „digitalen Wende“ (デジタル・ターン以降のエリア・スタディーズ)」としてプログラムを組み直した。講師として、ベルリン・フンボルト大学ハラルト・ザロモン(Harald Salomon)博士(日本学)を招聘した。当日のプログラムは以下の通り：日時：2017年9月19日(火)14:00-18:00、場所：池袋キャンパス太刀川記念館3階多目的ホール、プログラム：14:00 受付開始、14:30-15:30 発題講演 ハラルト・ザロモン(Harald Salomon)博士(ベルリン・フンボルト大学日本学科)「ベルリンにおける森鷗外ポータルと日本研究」(Mori Ogai Portal und Japanologie in Berlin)、15:30-15:45 休憩、15:45-16:45 発題に対する応答(コメント)前田良三(研究代表者)、16:45-17:00 休憩、17:00-18:00 質疑応答・討論。ザロモン氏の講演は、ドイツの日本学における研究のデジタル化の具体例として、フンボルト大学附属森鷗外記念館が運営する森鷗外ポータルを取り上げ、そのコンセプトと構造を具体的に説明するとともに、ポータルによる情報のデジタル・ネットワーク上での可視化がもたらしたあらたな研究動向の例として、ヨーロッパ美術史、メディア文化論の研究者と日本学の専門家との共同研究プロジェクトの内容が示された。講演に続く質疑では、データのデジタル化がヨーロッパにおける日本研究という専門性の高い分野をさらに他分野との共同研究へと開いてゆく可能性への展望、またドイツの日本学における事例が、デジタル・アーカイブ化の立ち遅れが指摘される日本のヨーロッパ研究にとってどのような示唆を与えるかという点を中心に、討議が行われた。とりわけ、ドイツでも Heidelberg、Göttingen の両大学図書館および Wolfenbüttel 図書館のサイト、マックス・プランク研究所が関わる European Cultural Heritage Online (ECHO) など、研究資料・データの大規模なデジタル・アーカイブのプロジェクトが進行しつつある現状に鑑み、それを可能にしている行政の支援体制、さらには、ドイツにおける文書資料のアーカイブ化の歴史(とりわけ、各自治体や研究組織における図書館の伝統的機能と位置づけ)について、意見交換が行われた。なお、この国際ワークショップは、ドイツ語での集中的討議を行うため、非公開としたが、首都圏を中心に、他大学・他研究機関からもドイツ文学・文化、日本文学・文化の分野から30名を超える参加者があったことを付記する。
- ③ 国際ワークショップの前日および翌日に開催した研究会には、ザロモン氏と研究代表者・分担者が参加し、2月の国際シンポジウムにおける中心的論点、特にデジタル・アーカイブ(およびいわゆるビッグ・データ)が、人文学においてこれまで解釈行為が担ってきた中心的役割の根本的な見直しを迫っていると言えるかどうかという問題について、それぞれの研究領域での事例に基づく報告と討議を行った。そこで得られた認識は、以下のように要約される。(A) デジタル・アーカイブを前提とする場合でも、個別の文学作品や思想表現、文化現象に対する意味付けの行為としての解釈作業が中心となることに変わりがないものの、(B) それらの個別の事象がとりわけ創造的個別性として認知される前提となる表現の「標準」的あり方は、データの量的処理によって、従来よりも飛躍的に具体的かつ分析的に記述可能となり、さらに(C) 作品や表現の個別性が、そうした標準からの偏差として量的に「提示」されうるものとなる場合、そうした量的偏差そのものが新たな解釈の対象となるのではないかと予想される。その理由として、(D) デジタル・アーカイブを前提とするデータ発掘(Data mining)や、アルゴリズムによるデータ解析は、一方で分析結果の説得性(これ

研究【経過(成果)】の概要 つづき

まで人文学における「客観的実証性」と言われてきたものを飛躍的に高めうる可能性を持っているが、そうした量的解析の結果が有意性を獲得する前提となる「意味付け」の枠組み自体は、常に研究者の主観性を伴う「解釈」によって産出されるという点が挙げられる。また、(E) 現状では大量のデータ解析を行うアルゴリズムそのものの検証は、研究者にとって実質的には不可能と言わざるを得ず、ここに情報理論の研究者と人文学の研究者の組織的な共同研究の課題が存するということになる。なお、ドイツ文学・文化の個別研究分野に即して言えば、(F) 中世・近世初期の文学テキストの分析、ならびに広義の社会文化現象を背景に文学・思想を考察する研究の場合、さらには、文学・思想と同時代の他のジャンルのテキストの相関性に着目する「ディスクール分析」において、デジタル・アーカイブが研究上大きな可能性を持つのに対し、個別作品の価値に関わる研究(批評および内在解釈)においては、デジタル・アーカイブはあくまで研究上の補助手段にとどまるケースが多い点も確認された。

- ④ 研究代表者前田と分担者坂本は、2017年9月30日岡山大学、および10月1日日本独文学会秋季研究発表会(広島大学)において、他研究機関の研究者と、本プロジェクト研究を踏まえた共同研究の立案と細部の画定のための意見交換を行った。本研究の展開として、2018~2021年度の科研費(基盤(B))を申請した。
- ⑤ 昨年度積み残していた作業として、ドイツ文学・文化研究の各分野におけるデジタル・アーカイブ化の状況の把握と、そのインデックス化がある。本年度は、研究代表者・分担者がそれぞれ個別の実証研究で得られた各分野のデジタル・アーカイブ化状況に関して、研究会を通じて情報共有を図った上で、インデックス化の作業に着手している。特に、インデックス化に当たってどのような検索項目を盛り込むかに問題を絞り込み、中世、近世、近・現代の文学・文化研究の各々の分野から一つの事例を選択してインデックス化のモデル構築の準備を進めた。
- ⑥ 上記共同研究と平行して、研究代表者・分担者は個別に以下の研究活動を行った。(1) 研究代表者前田は、2017年11月、ドイツ(フランクフルト大学、ベルリン・フンボルト大学、チュービンゲン大学)およびオーストリア(ウィーン大学)において、ワークショップ参加を予定していた研究協力者との意見交換を行うとともに、ベルリン・フンボルト大学における国際シンポジウムにおいて、本プロジェクトの成果の一部を、「人文学のデジタル的転回とアジア・ジャーマンスタディーズ」のテーマで発表した。(2) 研究分担者副島は、ドイツ(ヴッパータール)を中心に、2017年4月から8月にかけて数次にわたり、身体文化・表象文化研究(舞踏研究)の現状とデジタル・アーカイブ化された研究資料の調査を行った。(3) 同新野は、2017年8月、同じくドイツ(ベルリン・ドレスデン)において、表象研究(演劇)分野のデジタル・アーカイブの状況の調査を行った。(4) 同井出は、2017年5月ロストック大学にて中世後期の印刷出版物におけるデータ保持・拡散の変化について口頭発表を行い、8月ドイツ語研究所(マンハイム)において研究資料調査に従事した。(5) 同坂本は、2017年11月ボン大学において資料調査を行い、意見交換を行った。(6) 同浜崎は、ドイツにおける、移民問題、難民問題をテーマとした文学作品、演劇などの文化表象について、デジタル化された資料の調査を行うとともに、ストックホルム・ウプサラ大学での研究打ち合わせを行った。これら個別研究の成果については、次の「研究発表」を参照されたい。

以上の共同研究および個人研究を通じて、本プロジェクト研究の目的の一つである、国際的・学際的研究基盤の構築に関して、ドイツ(ベルリン・フンボルト大学、ボン大学、チュービンゲン大学、ケルン大学、ミュンヘン大学、フランクフルト大学)、オーストリア(インスブルック大学、グラーツ大学)、アメリカ合衆国(カリフォルニア大学アーヴァイン校)の研究者との緊密な協力関係体制とネットワークを構築することができた。また、学際的にも、日本およびドイツ語圏の日本学、宗教学、言語学の各分野との共同研究についても、一定の成果をあげることができた。

研究発表 (研究によって得られた研究経過・成果を発表した①～④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。)

- ①雑誌論文 (著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ)
- ②図書 (著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数)
- ③シンポジウム・公開講演会等の開催 (会名、開催日、開催場所)
- ④その他 (学会発表、研究報告書の印刷等)

- ①
- Manshu Ide: Abschriften des Mentelin-Bibeldrucks– Zur Funktion handschriftlicher Überlieferung im Zeitalter des Buchdrucks – In: Neue Beiträge zur Germanistik. Bd. 16, Heft 1 (Internationale Ausgabe von „Doitsu Bungaku“), S. 146-165
 - 坂本貴志「ヒメラのペトロンと「母たち」－世界の複数性の時代におけるゲーテのオリエント観」、『シェリング年報』25号、2017年、55－59頁
 - 浜崎桂子「『恐れ』の言説との戦い方——挑発的な『引用』の功罪 ファルク・リヒター『FEAR』をめぐる」、『ドイツ研究』(日本ドイツ学会) 第52号 2018年、8－25頁
- ②
- Ryozo Maeda: *Kokugaku* und die deutsche Romantik: Zur Formation des kulturwissenschaftlichen Japan-Diskurses aus der Analogie. In: Religion, Politik und Ideologie: Beitrage zu einer kritischen Kulturwissenschaft. Festschrift fuer Klaus Antoni zum 65. Geburtstag. Hg. von Michael Wachutka, Monika Schrimpf, Birgit Staemmler. München: iudicium 2018, 405 Seiten, S. XXX – S. YYY.
 - Ryozo Maeda: Von der Kultursprache zu Sprachkulturen? Deutsche Sprache und Germanistik aus japanischer Sicht. In: Goltschnigg, Dietmar (Hg.): *Wege des Deutschen. Deutsche Sprache und Germanistik-Studien aus internationaler Sicht*. Tübingen: Stauffenburg Verlag 2017, 475 Seiten, S. 333-339.
 - 副島博彦)「『人造人間』の誕生—近代の身体文化」、松井孝典編『全・地球学』、ウェッジ、2018、46－47頁
 - 新野守広「東西分断時代のドイツ」(『知ってほしい国ドイツ』(高文研)、2017年、68－75頁)
 - 新野守広「エネルギーの交感—異色の現代能『ハムレットマシーン』」(『現代能楽集』の挑戦—錬肉工房 1971～2017』(論創社)、2018年4月刊行予定、51－61頁)
- ③
- Regionalwissenschaften nach der »digitalen Wende«:Internationales Workshop des SFR-Projekts der Rikkyo-Universität, Tokyo (19. September 2017)
- ④
- Ryozo Maeda: Wissenschaftsgeschichtsforschung und Asian German Studies. Invited Lecture, Studentag "Asian German Studies" - Methoden, Gegenstände, Ziele. 3. Deutsch-Asiatischer Studentag Literaturwissenschaft. Eine Kooperation der Friedrich Schlegel Graduiertenschule (Freie Universität Berlin) und der Mori-Ôgai-Gedenkstätte (Humboldt-Universität zu Berlin), gehalten am 03. 11. 2017, Mori-Ôgai-Gedenkstätte, Berlin.
 - Ryozo Maeda: Regionalstudies nach der „digitalen Wende“. Einführung in das Workshop des SFR-Projekts der Rikkyo-Universität, Tokyo (19. 09. 2017).
 - Hirohiko Soejima: Übersetzung und Choreographie im Fall von Pina Bausch (講演), ボン大学 (ドイツ) 2017年6月29日
 - 坂本貴志「世界の複数性と永遠の哲学—ゴットシェートと山片蟠桃」、日本18世紀学会第39回全国大会、立教大学、2017年6月(学会発表)